

## 4 鏡像段階論とグノーシス主義

大田 俊寛

自分自身について思考すること、あるいはより感覚的に、自分自身の姿を凝視すること。ソクラテスが「汝自身を知れ」という命題を古代ギリシアの思索に導き入れて以来、自己思惟、あるいは自己観照のモチーフは、陰に陽に西洋哲学の根幹を支えてきた。本稿ではグノーシス主義の諸神話におけるそれらのモチーフの特殊性を分析することに主眼が置かれるが、まずは手短かに、古代ギリシア思想における「自己観照」の二つの典型的な例を挙げてみることにしよう。

### 1 古代ギリシア形而上学における自己観照

アリストテレスは『形而上学』の第一二巻において、神スィスの理性の思惟について次のような論理を展開している。神

的理性は世界でもっとも善なる者である。そして、神スィスの思惟がもっとも優れた思惟であるためには、その対象もまたもっとも優れたものでなければならない。それゆえに神スィス的理性は、最善なる者である自分自身を永遠に思惟しつづけることになるだろう。そして、「この観照テオリヤは最も快であり最も善である」（第一二巻第七章 1072b.26）。アリストテレスによれば、神スィス的理性は自己自身を観照し、不動のまま存在している。そして世界は、世界のなかで最善なる者である自己観照する神スィス的理性を中心とし、それを究極的目的の因として運動しているのである。すなわち神スィス的理性とは、自らは不動のまま世界全体を運動させる「不動の動者」である。

次に、三世紀の新プラトン主義者であるプロティノスの体系を概観しよう。プロティノスは「一者・知性・魂」という三つの存在論的位相を確定することによって、プラトン主義的世界観を体系的に整備しようとした。その世界観において頂点に据えられているのは、あらゆる実体的属性を超越した「一者」である。それでは、語りえぬ一者からどのようにして「知性」の世界が流出しうるのか。プロティノスは次のように述べている。「すると、「一者は」どのようにして知性を生むのであるうか。むしろ、自己自身

の方をふりむいて、完全に見てしまつ」とによつてである。そしてこの見るはたらきが知性なのである。「三つの原理的なものについて」(V.11)。至高神である一者は自分自身の姿をふりかえり、自分自身の像を認識する。一者の「似像」たる知性は、一者の自己観照のはたらきによつて生み出されるのである。

知性が一者の似像として流出したように、魂は知性の似像として流出する。そして人間が位置するのは、三つの存在論的階層のなかで最下層のレベルである魂の世界である。このように、至高神たる一者と人間のあいだにはきわめて大きな距離が存在すると考えられている。しかしこのことは直ちに、神と人間の関係が希薄であるということを意味するだろうか。そうではない。プロティノスの哲学においては逆説的に、神と人間との神秘的一体化が幾度も説かれることになる。人間の魂はまず初めに、世界に存在するさまざまな美を外的事物として認識する。しかし魂は次第に、それらの美が自己自身から発していることを知るようになる。世界における真なるもの、善なるもの、美なるものの探求を媒介とし、魂は流出の連鎖をたどつて上昇する。そしてプロティノスは、人間の魂と一者の出会いを次のように描写している。「そこに見ることができるのは、見る」

とが許されるかぎりの、かのもの(「一者」)であり、また自己自身なのである。その自己自身は、知性的な光明にみだされて、ひかり輝く自己自身であり、あるいはむしろ光そのものとなつて、きよらかに、軽やかに、何の重荷もなく、神と化したというよりは、むしろすでに神であるところの自己自身なのである(「善なるもの一なるもの」(V.9.9)。プロティノスによれば、世界は至高神たる一者の自己観照によつてその端緒を開かれる。そして、世界は至高神が認識した自己の像を基礎に成立しているがゆえに、美なるものとして存在するのである。またその世界に住む人間は、世界にたいする認識を深めるにつれて、ついには自分自身の本質を認識するにいたる。人間の本質とは神なのであり、人間は自己の本質たる神と対面する。言い換えれば人間は、

神である自分自身を観照することによつて完全なる自己同一性を確立し、認識の道程を終えることになるのである。

以上に手短かに挙げた二つの例から、古代ギリシア形而上学における自己思惟、自己観照のモチーフについて次のような性質を提示することができる。まず第一に、至高神の自己観照は、可視的世界が善美なるものとして形成される、あるいは善美なるものとして運動しつづけるための基盤を提供するということ。そして第二に、自己を認

識することは認識する者に快と喜びを与えると同時に、完全なる自己同一性を確立させるということである。総じて言えば、古代ギリシアの形而上学において、神・世界・人間の三者は自己思惟のモチーフによって親和的に結びつけられている。

## 2 鏡像段階論

西洋哲学の歴史のなかで自己思惟のモチーフはさまざまな形に変奏されていくが、「汝自身を知る」ことがすなわち真理を知ることであるという「自己思惟＝真理」の強固な連結は、一貫して保持されてきた。とはいえ二〇世紀に展開した心理学的諸研究は、一方では実験的・実証的な側面から、また他方では純粹に理論的な側面から、人間が自分自身を知るということが人間の意識にたいしてどのような影響を引き起こすのかということを、より精密に探求してきた。そのような諸研究を総括しうる概念の一つが、ジャック・ラカンの鏡像段階論である。われわれはグノーシス主義の諸神話における自己思惟の分析に入る前に、鏡像段階論における自己観照がどのような性質をもつものとして説明されているかということについて簡単に確認して

おくことにしよう。

まずラカンは、人間が未熟な生物として生まれてくること、とくにその神経系が未発達のままに生まれてくることを指摘する。中枢神経系の未成熟さのために、幼児は自己の身体を統一的に知覚することができない（寸断された身体）。内面的な統一的自己像が形成されていないということは、幼児にとつて自己と外界の区別が明確になつていないということの意味する。幼児は、世界にたいして何らの意味や分節を認識することができない。出生時における幼児は、環界にたいする原初的不調和にさらされながら、欲動的力オスの渦に巻き込まれている。

しかし幼児は成長のある段階において、自己の全体像を一挙に見いだすことになる。それが生後六カ月から一八カ月までと想定されている「鏡像段階」である。幼児は鏡に映った自己の姿を見つめながら、自己の存在についての最初の思考を開始する。「主体が（離乳期の月齢で）鏡像のなかに認めるものは、主体に本来備わる精神の統一性である。主体がそこに認めるのは、イマーゴの理想型、似像の理想型である」（ラカン『家族複合』六一頁。しかしここでは、ザン『鏡の心理学』一九三頁の訳文を採用した）。幼児は自己の姿を鏡のなかに認識して歓喜する（「アハー体験（Aha-

Etiehnis」と呼ばれるもの。ラカン『エクリ』一二五—一二六頁)。それまで「寸断された身体」を抱えていた幼児は、自己が世界のなかでどのように存在しているかを知り、自己を同一化するべき理想像を見いだすことになる。

このようにわれわれは、古代ギリシア形而上学と現代の鏡像段階論のあいだに、まずは著しい類似性を見いだすことができる。両者はともに、自己の姿を見つめることが「自分とは何者か」という問いに答えを与えるものであり、それによって得られる自己同一性の感覚にたいして人間が歓喜の感情を抱くということを指摘しているからである。とはいえ鏡像段階論にとって、鏡のなかに自己の像を発見するということは自己同一性の獲得という肯定的な意味のみをもつわけではない。ここではラカンの理論に触発されて行われたメルロ＝ポンティの講義録から引用しよう。

幼児にあつては、鏡像の了解とは、鏡の中に見えている姿をおのれの姿と認めるところにあります。幼児の世界に鏡像が入りこんで来るまでは、身体は幼児にとって、強烈に感じられはしても混沌とした現実なのです。自分の姿を鏡の中に認めるということは、幼児にとっては、自己自身の視像 (spectacle) がありうるということを示

ぶことです。そのときまで、彼は自分を一度も見ただことがなかつたのであり、そうでないとしても、せいぜい身体の目に見える部分を眺めるという形で言わば自分を盗み見たことがある程度です。ところが鏡の中の像を通して、彼は自分自身の観客たりうるようになります。幼児は、鏡像の習得によって、自分が自己自身にも他人にも見えるものだということに気づきます。内受容的自我から可視的自我への移行、つまり内受容的自我からラカンのいわゆる「鏡の中の私」への移行は、パーソナリティの或る形態・或る状態から別な形態に移ることなのです。

(メルロ＝ポンティ『眼と精神』一六二—一六三頁。傍点は原文)

人間は自己自身の姿(とくに顔)を直接見ることができない。それゆえに人間は、鏡のなかに映った像を見ることによって自己の姿を間接的に見るのである。生まれたばかりの幼児は、鏡に映る光景と現実の光景をうまく区別することができない。しかし幼児の精神は次第に発達し、鏡のなかに映るものが現実には存在しない「虚像」であることを理解するようになる。人間は鏡のなかに映る自己を見つめ

ることによって、その姿と存在を認識する。しかし同時に、人間がそこで見つめているのは、あくまで自己の虚像にすぎない。

いわば人間は、自分自身の虚像しか見つめることができない。そしてメルロ・ポンティの指摘で重要なのは、鏡のなかに映る自分とは、同時に他者が見つめている自分であるという点にある。人間は鏡の中に自分自身の像を発見すると同時に、他者によって見られている自分自身の像を発見する。言い換えれば、自分にとつて虚像ではないその像を、周囲の自分以外の他者は、まさに自分自身の実像として認識しているということになる。自己の輪郭と全体像という自己同一性を与えてくれると同時に、他者の視線による疎外と収奪をもたらす自己の鏡像。人間はその鏡像を自己の理想像として我有化することができない。ここには、自己の像という同一物をめぐって、自己の視線と他者の視線、虚像と実像、自己同一化と疎外という両義的事態が、複雑なコントラストを帯びながら共存している。そして最初の自己認識にまつわるこのような両義的事態は、これ以降さらなる成長を続ける人間の精神においてもその基本的構図を提供することになる。

西洋哲学の伝統とは異なって、鏡像段階論は自己観照が

人間にとつて両義的な性質をもつということを明らかにした。ここから敷衍して、グノーシス主義の神話分析にとつて有用であると思われるモチーフを二点追加しておこう。

まず第一に、「妬み」という感情について。すでに述べたように人間は自己の像を理想像として認識したいという欲望をもっており、また同時に、他者の視線によつてもそれを承認されたいという欲望をもっている（欲望とは他者に欲望されたい欲望である）。しかし現実のほとんどのケースにおいて、そのような期待は裏切られる。他者の欲望の視線は自分以外の誰かに向けられており、人々は自己の像とは別の対象に「理想像」を見いだしているのである。そのとき人間は、自分に向けられるべき視線が他者によつて奪われていると感じ、その人物を妬む。

そして第二に、自己像の「偽装」について。人間は他者がどのような像を欲望の対象としているかを想定し、その像<sup>イメージ</sup>へと自己自身の像を適合させようとする。このような意味において、人間が自己観照によつて獲得する自己の像はいつまでも不変であるわけではない。他者が欲望する像はその人間がそれまで抱いてきた自己像としばしば（あるいは常に）食い違うが、人間は他者の欲望の視線に合わせ、偽装された自己像をあえて担う。

### 3 グノーシス主義諸神話における自己像

続いてわれわれは、鏡像段階の理論によって得られた知見を導きの糸としつつ、グノーシス主義諸神話における自己観照の構造を分析していくことにしよう。

まず最初に、『ヨハネのアポクリュフォン』（以下A Jと略す）を取りあげてみる。A Jの冒頭では、あらゆる属性を超越した至高神が徹底した否定神学によって語られている。鏡像段階論に照らして言えば、これは「寸断された身体」を抱えた、自己と外界の「原初的不調和」状態にある幼児を描いたものとして捉えることができる。両者はともに有機的な意味の世界に入り込む以前の「語りえぬ」主体なのである。そしてA Jにおいても、至高神に最初の意味と自己同一性を与えるのは鏡像体験である。至高神は自己を観照し、その似像（＝鏡像）バルペローを誕生させる。そしてバルペローは、<sup>イデア</sup>理念的な意味と形相によって分節されたプレーローマ界を生成させていくことになったのだ。その光景は以下のように描かれている。

霊の泉が、光の活ける水から流れ出て、すべてのアイオンとあらゆる形の世界の支度をした。彼は自分を取り巻く純粹なる光の水の中に彼自身の像を見たとき、それを認識した。すると彼の「思考」が活発になって現れ出た。（中略）これがすなわち万物の完全なる「プロノイア」、光、光の似像、見えざる者の影像である。それは完全なる力、バルペロー、栄光の完全なるアイオンである。

（『ヨハネのアポクリュフォン』、ベルリン写本 B26.19-

27.14）

A Jはそれほど多くのキリスト教的モチーフを見いだすことができないテキストであるが、そこで「独り子」たるキリストが誕生する過程は興味深い。バルペローは至高神が自己の鏡像を見つめることによって誕生したが、キリストは、鏡像たるバルペローが逆に至高神を見つめ返すことによって誕生するのである。また、A Jとの強い影響関係が想定されるエイレナイオス『異端反駁』のバルペロー・グノーシス派の神話では、バルペローは父に似た光を胚胎し、父はその光を凝視することによってこれを塗油して、キリストにしたとされている（『異端反駁』1.29.1）。

つまり、A J(そしてバルベロー・ゲノースス派)における鏡像段階の第一の側面は、鏡像の出現によって複数化された自己の像が、互いを「理想像」として承認する視線を交わし合うという事態として性格づけることができるだろう。プレーローマ界は、そのような相互承認の視線によって満たされている。

それでは、A Jにおける鏡像段階の第二の局面とはどのようなものか。それは可視的世界創造の端緒をなす「ソフィアの過失」と結びついている。

さて、われわれの仲間なる姉妹、すなわち「知恵」は彼女(もまた)一つのアイオンであったので、自

分の内からある考えを抱くに至った。彼女は霊の考えと「第一の認識」によって自分の中から自分の影像を出現させたいと欲した。《彼女のこの考えは無為のままではいなかった。そして彼女の業が不完全な形で現れ出た。その外貌には形がなかった。というも、彼女は彼女の伴侶なしに(それを)造り出したからである。それには母親の姿に似た形がなかった。》

(『ヨハネのアポクリュフォン』NHC,III,149-19)

プレーローマ界の最下位のアイオンであるソフィアは、至高神の自己観照の働きを模倣し、自己の姿を見つめることによって新たな神を生み出そうとした。しかし言うまでもなく、ソフィアはあくまで至高神とは異なる存在なのであり、彼女はまさに自分の姿を見誤り、そのゆがんだ鏡像、劣った「妬む神」であるヤルダバオートを流産してしまふ。

ソフィアは次に、他者の視線を意識する。彼女が考えたのは、自らのゆがんだ鏡像である醜いヤルダバオート(それはライオンと蛇の外貌を呈したとされている)を、プレーローマ界の神々に見られてはならないということだった。ソフィアはヤルダバオートをプレーローマ界の外部へ放逐した。

こうして造物主ヤルダバオートは、プレーローマ界の外部で、その不完全な模倣としての可視的世界を創造することになる。A Jの記述においてヤルダバオートは旧約の神ヤハウエと同一視され、その性格が「妬む者」であることが強調される。ヤルダバオートはプレーローマ界とその神々を妬みつつ、可視的世界を創造する。それでは、なぜ彼は妬むのか。それは彼が、すでに上述したような、互いを「理想像」とする相互承認の視線のコミュニティから疎外されているからである。ヤルダバオートは、自分に注がれ

るべき視線が他者によって奪われたと感じながら、プレーローマ界に嫉妬の眼差しを注ぐことになる。

続いて第二の例、ヘルメス選集に収められた『ポイマンドレース』の神話を見てみよう。そこで至高神は、自己の似像として人<sup>アントロポス</sup> 間を生み出し、これを溺愛する。

さて、万物の父であり、命にして光なるヌースは自分に等しい人<sup>アントロポス</sup> 間を生み出し、これを自分だけの子として愛した。と言つのも、彼は父の像を持っていて甚だ美しかったからである。すなわち、父も本当に自分の似姿を愛したので、自分の全被造物をこれに委ねたのである。

(『ポイマンドレース』12)

至高神は、自分自身と似たものであったがゆえに、子である人<sup>アントロポス</sup> 間を愛した。自己の似像を歡喜をもって受け入れるという神話のモチーフは、『ポイマンドレース』でも共通している。さらにこの神話では、そのような「ナルキッソス」性格は子である人<sup>アントロポス</sup> 間にも受け継がれている。至高神と同じように、人<sup>アントロポス</sup> 間は自己の似姿を愛する。至高神に可視的世界の管理を委ねられた人<sup>アントロポス</sup> 間はその領域におもむき、その世界を見下ろすが、彼はそこで水面に

反射した自己の鏡像を目にするのである。しかしこのような二度目の「ナルキッソス・モチーフ」は、人<sup>アントロポス</sup> 間の転落と結びつくことになる。

死ぬべき、ロゴス無き生き物の世界(「可視的世界」)に対する全権を持つ者(人<sup>アントロポス</sup> 間)は、天蓋を突き破り界面を通して覗き込み、下降するフュシスに神の美しい似姿を見せた。フュシスは、尽きせぬ美しさ と、支配者たちの全作用力と、神の似姿とを内に持つ者を見た時、愛をもって微笑んだ。それは水の中に人<sup>アントロポス</sup> 間の甚だ美しい似姿の映像を見、地上にその影を見たからである。他方彼は、フュシスの内に自分に似た姿が水に映っているのを見てこれに愛着し、そこに住みたいと思った。すると、<sup>アイト</sup> 思いと同時に作用力が働き、彼はロゴス無き姿に住みついてしまったのである。するとフュシスは愛する者を捕え、全身で抱きしめて、互いに交わった。彼らは愛欲に陥ったからである。(同 14)

われわれはここに再び、鏡像にたいして他者の視線が強い影響を与えているということを見ることができるとはいえ、A Jにおける他者の視線がプレーローマ界の神々の



ものだったのにたいして、『ポイマンドレウス』に出現するそれは可視的世界に住む存在者が放つ下方からの視線である。それらは「ロゴス無き生き物たち」であり、ロゴスをもたない彼女らは、ロゴスをもつ人アントロポス 間をあこがれの眼差しによって眺めている。

この場面では、鏡像段階論によって描き出された鏡像の二面的性質が不気味な協調関係を結び、「人アントロポス 間の転落」という悲劇的事件を形作っている。一方で人アントロポス 間は、自己の鏡像に理想像を見いだしてその美に酔いしれている。しかし他方、可視的世界の存在者たちはその光景を密かに盗み見ており、人アントロポス 間の鏡像を自分たちに快を与えるものとして強引に収奪するのである。間の勢力による、光の世界の像の収奪。グノーシス主義の諸神話はこの主題をきわめて多様な形式に変奏する。われわれは次に、間の勢力が転落した神格にたいしてどのように働きかけるのか、また光の勢力は転落した神格をどのようにして救出しようとするのかということをも、「偽装」のモチーフを中心に分析していくことにしよう。

像の収奪によって可視的世界に落下した神的位格にたいして、間の勢力は欲望を抱いて接近する。彼らはその神の目を引くために自己の姿を美しく飾り立て、その正当な求

婚者であるかのように偽装するのである。このような「偽装する求婚者」のモチーフは、グノーシス主義の神話に頻出するものの一つである。たとえば、再びAJを見よう。AJでは、偽装する求婚者のモチーフは「模倣の霊」との関連で現われる。アルコーンたちはブレイローマ界から到来した「生命の霊」の姿を模して「模倣の霊」を作成し、それを利用して人間の配偶者の見せかけの姿を装う。彼らは人間たちと交接することによって人間に内在する光の粒子を分散させ、奴隷の種族を増やし続けるとされる。

偽装する求婚者のモチーフをもっとも典型的な形で提示しているのは、『魂の解明』というテキストである。その原因については明確にされていないが、女性的位格である「魂」は父たる至高神のいる場所（処女の部屋」とも呼ばれる）から墜落し、可視的世界でさまざまな凌辱にさらされることになる。

そして彼女はその身体で春をひさぎ、すべての人々に身を渡した。そして彼女は、自分が身を寄せた人を自分の夫と信じたのである。彼女は、不信・無法の姦淫者どもに身を渡し、彼らが彼女を辱しめたので、深く嘆き、後悔した。しかし再び彼女が、これらの姦淫者どもから顔

をそむけ、他の人々のもとに走ると、彼らは彼女に強いて、彼らと共にいさせ、彼らに褥の上で、主人に対するごとく仕えさせるのであった。しかし彼女は、羞恥のあまり、もはや敢えて彼らのもとから離れなかった。他方彼らは、長い間彼女を騙し続けた。あたかも彼女をひどく尊敬しているかのごとく、忠実な本当の夫を装って。

そして結局のところ、彼らは彼女を棄て、去り行くのであった。  
(『魂の解明』NHC,II,6,1,28,1-18)

天界から転落し、可視的世界で闇の勢力の「偽装」の戦略に翻弄される神を、光の世界の救済者はどのようにして救出するのだろうか。救済者はまず、可視的世界を支配する天使たちに気づかれないことなく、転落した神のもとまで降りていかなければならない。エピファニオスの『葉籠』に記されたシモン派の神話では、次のように描写されている。

各々の天で私(「救済者」)は異なった姿をとった。それは各々の天にいる存在をかたどった姿であって、私がそれを支配する天使たちに気づかれることなく、エンノイア(「転落した女神」)のもとまで下りるためであった。

ここで救済者は、闇の勢力の姿を「偽装」する。彼はあたかも闇の勢力の一員であるかのようなふりをしながら、転落した神の救済に向かうのである。すでに見たように、転落した神は闇の勢力の偽装された自己像に目を奪われ、凌辱を被ることになったのだ。これにたいして光の救済者は、闇の勢力の自己偽装の戦略を逆向きに応用する。彼は天使の姿を偽装し、自己の像を闇の勢力の像へと変貌させる。しかし救済者は、これによって闇の勢力の目を逃れるのである。彼は自分が「見られる存在」であることをすでに十分に意識している。

グノーシス主義の諸神話において、その救済者はさまざまな形態の偽装を利用し、可視的世界にさまざまな自己像を投プロジェクト影プロジェクトさせることによって、救済の計プロジェクト画を推し進めていく。そこにわれわれはグノーシス主義的仮現論の特殊性を見いだすことができるのだが、最後にそのもつとも過激な形態を提出しておこう。それはヒツポリュトス『全異端反駁』に記録された「セツの釈義」と呼ばれる神話である。その物語では光が精液に喩えられており、男根と同一視される「闇なる風」は子宮の内部に射精することによってそ

ここに光を幽閉した。救済者である、「ロゴス」は、子宮に幽閉された光を次のような仕方では救出しようとする。

天上の光の完全なるロゴスは、「その形相において」獣と融合させられる。その獣とは、汚れた子宮の中に入った蛇（＝男根）であり、ロゴスは獣それ自身の外見によって「子宮を」欺くのである。それは「ロゴスが」、水の最初の子孫、「すなわち」蛇、風、「そして」獣によって子宮の浄性の中へと生み落とされた完全なるヌース（＝光）を取り囲む鎖をほくためである。彼が言うには、これもしもへの形であり、そしてこれこそが、神のロゴスが処女の子宮へと到来した必要性なのである。

（『全異端反駁』V,14）

光を解放しようとするロゴスは、男根の形態をとって子宮へと侵入する。ロゴスの偽装に欺かれた子宮は、それを喜んで受け入れるのである。さらにここでは、ロゴスの偽装の論理が処女懐胎の説話と接合されている。ロゴスは男根の形態へと変容したが、その姿はもちろん偽装された仮のものに過ぎなかった。それゆえに、子宮の処女性性は損なわれることがなかったのである。

古代ギリシアの形而上学が自己観照の肯定的一義性のみ注目し、それによって神・世界・人間の関係を融和的に包み込もうとしたのにたいして、グノーシス主義の思想は人間が自己を観照するがゆえに引き裂かれていかざるをえないということにその主題を置いている。そしてそのことは同時に、単一の意味によって構成された形而上学的世界観の位階秩序を脱構築し、自己観照の二義性によって分割された複雑な物語を絶え間なく産出することにつながっていったのである。

グノーシス主義にとって世界とは、実像と虚像とが判別困難なままに乱れ飛び、その両者が互いの姿を反射させ合いながら終わりのなき物語をつむぎ出していくアリーナである。エイレナイオスが言うように、「毎日、彼らの誰もが、なにか新しいことを考え出す」。あたかも人間が、毎日自分の姿を鏡に映してみないではいられないように。

#### 「参考文献」

『プロティノス・ポルピュリオス・プロクロス』（田中美知太郎・水地宗明・田之頭安彦訳）世界の名著一五、中央

公論社、一九八〇年

アリストテレス『形而上学 上下』(出隆訳) 岩波文庫、一  
九五九 六一年

ルネ・ザゾ『鏡の心理学 自己像の発達』(加藤義信訳)

ミネルヴァ書房、一九九九年

ジャック・ラカン『エクリ』(宮本忠雄他訳) 弘文堂、一  
九七二年

モーリス・メルロ＝ポンティ『眼と精神』(滝浦静雄・木田  
元訳) みすず書房、一九六六年

荒井献・大貫隆・小林稔・筒井賢治訳『ナグ・ハマディ文  
書』全四巻、岩波書店、一九九七 九八年

『ヘルメス文書』(荒井献・柴田有訳) 朝日出版社、一九八  
〇年

*Irené de Lyon : Contre les Hélices, Livre I* (Sources  
Chrétiennes) édition critique par A. Rousseau et L.  
Doutreleau, 1979.

*The Panarion of Epiphanius of Salamis*, translated by  
Frank Williams (Nag Hammadi Studies 17), Leiden :  
Brill, 1987.

*The Refutation of All Heresies by Hippolytus*, translated  
by J. H. MacMahon, Edinburgh: T & T Clark, 1911.